連載　地域で輝く人に聞く
File_12

SUNだなと。

誰でも助けてって言っていい「第3の居場所」を地域に

場とつながりの研究センター
理事・事務局長
大島 一晃さん
Kazuaki Oshima　三田町

ラジオ・ハニーFMでもっと詳しく聴けます！【12/21 15時10分～】

「助けてって言っていいんです」地域の子どもたちと日々向き合い、居場所づくりに取り組む大島一晃さん。「自分にしかできないことをしたい」と考えていた大学生のとき、大学の教授に誘われ2005年「場とつながりの研究センター」の立ち上げに携わった。

その後、不登校の経験がある高校生との出会いが転機となった。「もう一回ちゃんと勉強がしたい」そのつぶやきを聞き、2013年に三田まちの寺子屋「まなびあ」を始めた。地域の拠点 三田じばやん倶楽部で毎週水・金曜に開く。最初は不登校や人間関係に悩む子に勉強を教えるのが中心の「学習支援の場」だった。しかし、あることに気付く。この子たちには家や学校に「居場所」が無いことを。「勉強を教えるより、大切なことがある」それは子どもたちの声に耳を傾けること、一人一人と向き合うこと。まなびあを家や学校以外で安心して行ける「第3の居場所」にしよう――居場所づくりに取り組み始めた。ここでは小学生から高校を卒業した子まで、みんなが思い思いの時間を過ごす。勉強したって、話をしにきたって、ただぼーっとしたっていい。大学生や地域のおじちゃん・おばちゃんなど「親や先生以外の大人」と関わる中で頼れる人ができ、選択肢を増やしながら、学び、成長する。

「困っている子どもほどSOSが出せない。だからこそ、地域に居場所があり、SOSに気づける大人を増やすことが必要なんです」と大島さんは話す。

10月末に再開されたこども・地域食堂「まかないキッチン」には、まなびあの子どもたちに加え、近所の子どもや保護者など50人が集った。地域のおばちゃんたちが作るカレーやおかずをみんなで囲みながら、久しぶりの再会に元気な声を響かせた。そこには子どもたちに変わった様子がないか、一人一人に優しく声をかけ寄り添う大島さんの姿があった。

「まなびあ」は自分が自分でいられる私の大切な「居場所」。昔からアットホームな雰囲気で、ユニークな人が多くてここが大好きです。そして、大島さんは私の心の育て親のような存在。悩んだ時には、いつもただ黙って話を聞いてくれて。大島さんの人柄に何度も救われてきました。自分の思うままに生きていれば何とかなる――そう教えてくれたこの「居場所」をこれからも大切にしていきたいと私も思っています。

■三田まちの寺子屋「まなびあ」に小学生の頃から通う
津田 雪葉さん

4

3

撮影時、笛は吹いていません。感染症に配慮し、撮影しています。
1

6

5

2

8

7

1　全校児童の12人。いつも一緒で、家族のような存在。授業後は全員でドッジボールをしたりと大の仲良し！

2　１年生にとっては初めての衣装を着てのリハーサル［写真は「三番叟」］。みんなで音を揃えました！

3~4　みんなで息を合わせて一輪車での演技。今年は運動会で披露！全員で乗ることができました。

5~8　月に１度の神楽教室。地域の人が講師として教えてくれています。上級生が下級生に教え合う場面も。

つなぐ想い、守る伝統

学校自慢 vol.12
母子小学校

母子小学校の創立は明治6年5月。創立当時は正儀小学校という名前だった。明治22年4月、5つの村が合併してできた小野村に「母子小学校」として発足した。

自然環境に恵まれ、少人数校としての学び舎の特徴を活かし、平成24年からは「小規模特認校制度」を導入。一定の条件のもと市内全域から就学を認めている。

現在の児童数は12人。リーダーとして下級生をひっぱる6年生2人に自慢を聞いた。

大切に受け継がれる2つの伝統

母子小学校といえば、「一輪車」と「母子こども神楽」が自慢です！この2つの取り組みは平成3年度から30年続いています。

一輪車では、夏に演技を、冬に長距離走を行います。夏の演技では1学期から夏休みにかけて多いときには1日に2時間も練習します。4月には一輪車に乗れなかった1年生も、みんなで一緒に練習して、全員で演技。練習は大変なこともあるけど、本番で成功した時の達成感は大きいです。冬の長距離走では1~2年生が2・5キロメートル、3~6年生は8キロメートルも走るんですよ！

伝統を守る中でうまれる想い

母子神楽は、母子にある大歳神社の祭りで行う伝統芸能です。次の世代に継いでいくためにも、地域の人が毎年教えてくれています。9つある神楽のうち、刀切りが見どころの「三番叟」と獅子が大きく舞う「悪魔払い」の2つを演舞します。

6年生は獅子をかぶって踊る「舞」、3~5年生は「篠笛」での伴奏、1・2年生は「太鼓・鈴」での伴奏と、舞を補助する「お持ち」を担当。学年が上がるにつれ新しいことをマスターしないといけないのが、難しくもあり、楽しいところでもあります。

一輪車もこども神楽も、全校児童が一つになって頑張ります。学年に関係なく、どんな時もみんなで助け合って、自然と声をかけ合っていけるのが、母子小学校の大好きなところです！

祭りは年代をこえて交流できる大切なもの。地域の伝統芸である神楽を学校で取り入れてもらうことで、代々受け継いだものをこれからを担う子どもたちが守り抜いていくという意識を持ってもらえるように感じます。

◀神楽教室講師の皆さん
戸出義弘さん・戸出成耕さん・戸出茂男さん